

CAS における「地域的な文脈とグローバルな文脈」の実践

CAS コーディネーター 藏野皓士

1. 概要

CAS は、IB ディプロマプログラムの中核をなす「創造性・活動・奉仕」の学びである。IB 機構は CAS のねらいの一つとして、「地域や世界のコミュニティーの一員として、他の人や環境に対して責任を負っていることを理解する人」を育てることを示している (International Baccalaureate, 2015)。本校ではこの理念を踏まえ、地域での具体的な経験を出発点に、そこに現れる課題を地球規模の課題や相互依存の関係の中で捉え直す視点を重視している。すなわち、「地域的な文脈とグローバルな文脈」を、生徒が身近なコミュニティーと関わりながら、世界とのつながりを実感的に理解するための教育的視点として位置づけている。本実践では、地域社会との具体的な関わりを通じて、生徒が他者と協働し、自らの行動の意味を省察しながら、社会への関わり方を主体的に考えることを重視した。

2. 生徒の取り組みと教員の働きかけ

〔生徒の取り組み〕

「災害に関する絵本を多言語で作ろう」では、生徒が自然災害、とりわけ地震に備えるための知識や行動を、スペイン語・中国語・英語・日本語でまとめ、視覚的にわかりやすく伝える絵本を作成し、発表した。自治体と連携をとりながら、地域の子育て支援施設、国際交流に関わる施設等で紹介・展示されるなど、地域社会との接点を広げる活動となった。この活動は、防災を単なる知識伝達としてではなく、多文化共生、情報アクセスの保障、災害時に多様な人々が安全に行動できる地域づくりという観点から捉え直す契機となった (図1)。



(図1) 防災に関する絵本

「YIS Fairtrade Project」では、フェアトレードの普及を目的として、フェアトレードの材料を用いたカフェを一般客に向けて開催し、さらに他校やフェアトレード推進団体との交流を行った。この活動では、商品を提供することにとどまらず、その背景にある生産、流通、消費の関係を来場者に伝え、日常的な購買行動が生産者の権利、公正な取引、経済的格差の問題と結びついていることを考える機会を生み出した。他校や外部団体との交流は、生徒がフェアトレードを学校内の取組に閉じず、地域社会の中で公正な経済のあり方を共有していくための重要な接点となった (図2)。



図2 : Fairtrade Project

「ぼくらの星について本気で考えてみた」では、地球温暖化のローカルな影響や解決策に着目したワークショップを県内の小中学校や YIS 祭で行い、気候変動を地域の子どもたちにとって理解しやすい問いへと具体化した (図3)。

「保育園児と英語で触れ合おう」では、行事や文化を題材にした活動を通じて、保育園児に英語に触れる機会を提供し、子どもたちとの信頼関係を育み、異なる文化に親しむ経験をともにつくる契機として言語を位置づけた。



図3 : ぼくらの星について本気で考えてみた

これらの活動に共通しているのは、生徒が「地域で何かを行う」段階にとどまらず、具体的な相手、場所、制度、文化との関わりを通じて、自らの行動がどのような社会的意味をもつのかを検討している点である。CAS は、成果物やイベントの実施に加え、その過程で生徒が何を学び、どのように次の行動へつなげたかを重視する実践的探究として機能している。

〔教員の働きかけ〕

教員の働きかけの中心は、生徒の経験を意味づけ、活動の質を高めるための足場かけを行うことである。その際に重視したのは、第一に「真のニーズ」の検討、第二に「地域的文脈とグローバルな文脈の接続」、第三に「目的意識をもった振り返りと次なる実践への発展的構想」である。

第一に、教員は生徒に対し、「その活動は誰の、どのようなニーズに応答しているのか」、「自分たちが想定したニーズと、当事者や地域社会が実際に抱えるニーズは一致しているのか」を考えるよう促した。これにより、生徒は活動を自己完結的な善意にとどめず、受け手の文脈に即して再構成する必要性を認識するようになった。

第二に、教員は「この活動は、地域の課題であると同時に、どのような地球規模の課題や相互依存の関係とつながっているのか」を考察するよう促した。防災は情報へのアクセスと多文化共生へ、フェアトレードは公正な経済へ、環境ワークショップは気候変動に対する市民的参加へ、保育園児との英語活動は多言語・多文化理解へと接続される。こうした問いかけによって、生徒はローカルな実践を、地域の中だけで完結させず、より広い社会的・国際的文脈の中で捉え直す視座を獲得していった。

第三に、教員は「今回の経験から何を学び、それをどのように今後の実践へ発展させるのか」を継続的に確認した。CASにおける振り返りは、活動後の感想にとどまらず、経験を分析し、自らの成長課題を見だし、次の実践を構想するための知的な営みである。生徒は、計画、実施、振り返り、改善という循環を通じて、活動を一過性の実践に終わらせず、より持続的で実効性のある実践へと発展させる姿勢を身につけていった。

3. 振り返りと今後の展望

本実践を通じて、生徒は地域社会との関わりの中で、自分たちの知識、価値観、表現方法を相対化し、相手の文脈に応じて行動を更新していくことの重要性を学んだ。そこでは、地域は活動場所であるだけでなく、生徒が社会的課題の複雑さに向き合い、自らの責任を具体的に考察するためのリソースとなった。

今後は、こうした生徒の学びを、より持続的な CAS の実践へと学校全体としてつなげていくことが課題である。地域社会からのフィードバックを丁寧に取り入れ、活動の計画、実施、評価、改善を循環させることにより、生徒は地域社会を、活動の成果を届ける相手としてだけでなく、真のニーズをともに捉え、学びを相互に深めていく協働の相手として理解していくことが期待される。

以上の実践は、いずれも地域に根ざした小さな行動を、世界市民としての学びへと高めるものである。地域的な文脈は、地球規模の課題を具体的に経験する場であり、グローバルな文脈は、地域での行動の意味をより広く捉え直す視座である。この往還を通じて、生徒が主体的かつ協働的に社会へ参画する力を育んでいくことが、本校 CAS における「地域的な文脈とグローバルな文脈」の一つの意義であると考えられる。

【引用文献】

International Baccalaureate. (2015). 「創造性・活動・奉仕」(CAS) の指導の手引き. International Baccalaureate.